

報告事項ス

平成19年度第2回教育審議会生涯学習分科会兼社会教育委員会議の概要について

平成19年度第2回教育審議会生涯学習分科会兼社会教育委員会議の概要について、別紙のとおり報告します。

平成20年3月20日

鳥取県教育委員会教育長 中 永 廣 樹

平成19年度第2回教育審議会生涯学習分科会兼社会教育委員会議の概要について

家庭・地域教育課

- 1 日時 平成20年3月5日(水) 13:30～15:35
- 2 場所 県立生涯学習センター「大研修室」
- 3 出席者 委員10名、事務局18名

4 議事及び審議等結果

(1) 社会教育施設概況調査結果を踏まえた公民館振興策について

振興策の柱建てについて協議。今後、事務局で意見集約の上骨子案に肉付けを行い、次回の分科会に提案することとした。

(2) 鳥取県スポーツ振興計画の策定について

振興計画の策定に当たっての経緯、今後のスケジュール等を説明。計画に盛り込むべき事項について協議。今後、事務局で意見集約の上、次回の分科会に計画案を提案することとした。

(3) その他(事務局からの連絡事項)

鳥取県教育振興基本計画の策定について、経緯・スケジュール等を説明。
平成20年度の社会教育関係団体及びスポーツ関係団体の補助金予算要求状況について報告。

5 委員からの主な意見

【社会教育施設概況調査結果を踏まえた公民館振興策関連】

〈公民館への集客と魅力ある事業〉

- ・「気軽に集える公民館」の項目に「居ながらにして…」という表現は「気軽に集える公民館」というフレーズと矛盾して読める。なるべく公民館に足を運んでいただけるよう表現を工夫してほしい。
- ・公民館には温度差がある。ホームページの集約などその状況を県民が知ることができるような仕組みを作ることは大切だが、ホームページの立ち上げ、管理をする人材も必要。
- ・スポーツ活動などで子どもも大人も忙しく公民館に集う時間がない。子ども対象の事業を組まなければ公民館に人は寄ってこない。
- ・スポーツ少年団の活動や塾通いなども公民館に集わない要因ではないか。
- ・小中学生の子どもだけではなく、高校生や有職青年も視野に入れて青少年が集う事業展開を考えなくてはいけない。
- ・高校生は部活動等で忙しく公民館に集うのは難しいが、すべての生徒が部活をやっているわけではない。生涯学習には集う喜びもあり、高校生・青年は忙しいから無理というのではなく、公民館側が若者を呼び寄せる工夫も必要。
- ・高校生や青年の年代はこちらがお膳立てしなくとも自らが企画する力を持っているので、それを生かせるよう仕向けられないか。
- ・私たちの団体では、自分たちのところだけでは集客が無理な時は他団体のイベントに相乗りさせて頂くことがある。公民館行事も早く計画を周知できれば子どもたちの行事と連携ができ、子どもを集めることができるのではないか。
- ・国庫事業の活用により利用者の幅を広げる方法はあるがわかりにくい。どのような事業があっただうすれば使えるのか公民館に行けばわかるようにしていただければありがたい。
- ・授業が終わってからスポーツ少年団の活動が始まる夕方までの時間、地域の方に協力いただき子どもたちを見ていただけるような仕組みなどもそういった事業でできないか。
- ・部活動を行う生徒を対象として、公民館で骨密度測定、食生活等の指導などを行ったら、生徒たちが公民館の掃除をしてくれるようになった。部活との接点、来てくれる

仕組みづくりも必要。

- ・公民館の高校部活動視察により公民館と高校の交流ができた。こういったことも有意義。
- ・振興策案の中での「子ども」の定義は中学生までか高校生までか、どこまでとしているのが不明確。

〈人材の確保と地域連携〉

- ・地域全体を見渡してボランティアなどをコーディネートできるような核となる人材が公民館にほしい。
- ・私の公民館では、学校などから人材についての照会があれば紹介したり、講師交渉したりしてあげている。どの公民館もやっているのではないか。
- ・学社融合ということになると地域（公民館や団体）と学校お互いがそれぞれ活動しなければならないが学校の動きが少し弱い。
- ・学校は人材を活用した後、次にどう活かすかを考えてほしい。地域の人から習った事を習った子どもたちが下の学年に教えたり、それらの子どもが今度は地域の人を学校に招いて一緒に遊ぶ取組なども必要。
- ・私の学校では、公民館が行事を企画する際は学校から代表を出すようにしている。子どもたちの参加も学級を通じてとりまとめし、人材がほしい場合は公民館に行けば紹介してくれ、スムーズにやっている。

〈公民館運営審議会の活性化〉

- ・公民館運営審議会は置いていない公民館もある。必要な際に設置すれば良いのではないか。予算決算を審議するだけでなく事業評価まで行えるシステムづくりが必要。

〈その他〉

- ・公民館職員は様々な事務局も持っており、事業を企画・立案する余裕がないのが実態。教育機関である公民館をどう支援していくかということも行政機関（市町村教委）の大きな役割。市町村教育委員会に社会教育主事のような専門職員がいてそこからいろいろな町の地域課題だとかそういうものを事業化していくのが本来の姿。
- ・かつては各市町村に社会教育主事がいたが現在は少なくなっている。専門職としての社会教育主事の配置を市町村に働きかけ、住民サービスを行う公民館職員を支援する事も大切。

【鳥取県スポーツ振興計画の策定関連】

- ・新体力テストでは全国的に体力低下。ボール投げなどは投げ方や力がないのではなく「握り方」がわからないのではないか。学校では補えない分、地域や家庭で補ってほしいと言っているがなかなか補えていないのが現実。
- ・子どもの体力向上については、小学校、中学校、高校という段階と卒業した段階、それぞれ検討すべきではないか。
- ・鳥取と鹿児島を除いて全ての県で振興計画が出来ているので、他県で成果を上げている部分、うまくいっている良い部分を参考にいただければよりよいもの出来るのではないか。
- ・スポーツをする機会も大切であるが、体力づくりプラス「体づくり」が必要ではないかと思う。「食育」も大きく関係するのではないか。
- ・運動不足をきっかけに公民館主催のウォーキングに出会った。それがきっかけで韓国のウォーキング大会に参加するようになったが、韓国では毎月ウォーキングの日を設けており、多くの市民が参加しこれにより市民の体力も向上している。こういった誰でも気軽に運動できる仕組みづくりをしてはどうか。
- ・子どもの体力低下については、学校体育が低下したのではなく、外でしっかり遊ばなくなっただからだと聞いている。昔は遊びの中で体力をつけてきたような気がする。外遊びを復活することは出来ないか。
- ・学校の中でスポーツ（クラブ活動など）をしない子ども達を放課後学校に残して遊ばせるというシステムもあっていいのではないか。都会では保護者が有料で預かってや

- っている。地域に帰ってしまえば子どもが少なく集団遊びができない。
- この頃の子どもの体力低下の原因として、「三間（さんま）」がないと言われていたが、今は4つの間がないといわれている。仲間がない、時間がない、遊ぶ空間がない、それと大人が手間をかけ仕掛けることをしていない。
 - ボール投げなどの能力低下の要因は、体力テストの種目と学習の教科がうまくいっていないためではないか。昔は体育の授業でソフトボールをやったりしていたため自ずと投げる力がついた。測定値と教科体育とのからみを考えないと改善の手だてがないのではないかと思う。
 - メンコで遊ぶ、紙飛行機を飛ばすなどの遊びは投げるという運動の原点。子どもの頃に刺激を与えらうまく伸びると思う。
 - 計画の対象を幼児期まで下げ、スポーツという概念をもう少し広げる必要があるのではないか。
 - 中学生くらいの時期はいろいろなスポーツを体験させ、続けさせて適正を見つけてくれればよい。後は本人のやる気次第で伸びる。
 - 総合型地域スポーツクラブの立ち上げを進めて子どもたちにいろいろなことを体験させてほしい。
 - 子どもの体力向上とか生涯スポーツの振興のためには、スポーツ指導者がある程度の勉強をしていただかないといけないと思う。
 - 指導者を活用したい場合、個人情報保護法の関係で情報が活用できないことがある。資格を持った指導者が活用できるよう人材バンクの在り方を考えていただきたい。

【参考】

〈委員名簿〉

氏 名	所 属・職 名 等	
浅川 滋男	鳥取環境大学環境情報学部教授	(欠)
油野 利博	鳥取大学地域学部教授	
石浦外喜義	鳥取城北高等学校教諭	
井上 耐子	鳥取県連合婦人会長	
入江 雅史	大山町教育委員会幼児教育課主幹兼社会教育主事	(欠)
梅木千賀子	鳥取県体育指導委員協議会理事	
北村 康男	青谷小学校おやじの会代表	(欠)
小谷 次雄	倉吉市成徳公民館長	
小林 重子	社団法人鳥取県老人クラブ連合会女性委員会委員	
土海 孝治	倉吉市立小鴨小学校長	
萩原 裕子	連合鳥取書記局職員	
福浜 隆宏	日本海テレビジョン放送株式会社アナウンサー	(欠)
水野 聖子	ガールスカウト日本連盟鳥取県支部長	
美田耕一郎	鳥取県子ども会育成連絡協議会副会長	(欠)
山田 節子	児童書を楽しむ会「つくしんぼ」代表	

〈事務局〉

次長、教育総務課、家庭・地域教育課、体育保健課、スポーツセンター